

# 民国期（1912－1937年）における中国の 大学女性教員に関する一考察

梁 樺 晶

## Abstract

During the Republic of China (*Minguo* era), the emergence and development of “Opening the Woman School”<sup>1</sup> and “Allowing women to receive education”<sup>2</sup> greatly promoted the process of employing female faculty members in universities. As the earliest female intellectuals in China, the number of female university faculty members is not very large in modern China. Most of them have academic background or overseas study experience, which gives them a broader perspective and more advanced thinking. Due to the entrenchment of traditional gender attitudes, female university teachers are also faced with a dilemma between family and work. Most of them wear many hats, and they have bravely explored the road of opening the living space and career choices of Chinese women. They have contributed to the society with their knowledge and influence of public opinion, also pointed out the direction for the women’s liberation movement.

**Key word:** *Minguo* era, women’s higher education, female university teachers

## はじめに

アヘン戦争後、清政府は帝国主義列強と一連の不平等条約を締結した。列強は中国に貿易港の開放を強要し、宣教師を中国に派遣した。女性宣教師も中国に来たが、その目的は、一方では教義を広め、自分の性別の特性を利用してより良い伝道をすることであった。一方では男性のように働いて、自らの価値を証明し、男女平等を目指すことであったかもしれない。彼女たちが布教を行う過程で、教育は伝道の重要な手段となり、女子教育の門戸開放に可能性を提供した。

1907年、清政府は「奏定女子小学堂章程」を公布し、中国の女子教育は本格的に国家の公的な教育体制にのせられた<sup>3</sup>。その後の女性社会進出に一定の文化的基礎を築いた。同時に、中国社会は沿海都市から内陸部へと近代化のプロセスを歩み始め、特に五・四「新文化運動」以降、

1 中国語では「興女学」、女子学校の設立を提唱することである。

2 中国語では「開女禁」、女子の教育禁止を解禁することである。

3 崔淑芬（1996）「近代中国における師範教育の展開：清末から1948年までを中心として」（博士学位論文、九州大学）、151頁。

男女平等など女性解放に関する思潮はさらに深く浸透し、社会は教育事業で働く女性を認めつつあった。社会の雰囲気も女性教師の就業に反対することはなくなり、女性教員の大学への進出が促された。ただし、大学の教員を担う女性は少なかったであろう。

民国期の大学女性教員の登場は、中国近代教育の歴史上重要な一章であった。女性は依然として多くの困難に直面していたが、一部のすぐれた女性教員が頭角を現し、将来の女性学者に道を開いた。民国期の大学女性教員に関する総合研究には、張（1997）<sup>4</sup>のものがあり、建国前の大学女性教員の誕生を時系列的に概観している。これ以降の多く研究は、民国期の大学女性教員の発展及び影響を分析するもの<sup>5</sup>や教育学の視点から女性教員の教育実践活動とその教育の特徴を研究したもの<sup>6</sup>に留まっているが、役割理論を用いて彼女たちの仕事と家庭の二重負担を分析する研究はまだ少ない。この時期の政策や世論の変化を考察することにより中国の教育分野におけるジェンダー問題をより深く検討できると思われる。杉本（2020）<sup>7</sup>によれば、日中戦争を契機に1937年に成立した中華民国臨時政府は高等教育機関の再編に取りかかったが、これにより女子に対する教育方針も転換を迫られた。そこで、本稿では20世紀初めから日中戦争が起きるまでの民国時代の女子高等教育に焦点をあて、大学女性教員の発展と女性の社会進出をめぐる人々の認識の変化に着目する。1937年以降に大学教員になった女性は分析の対象としないこととする。

方法としては、文献渉猟と統計を用いる。最初の大学女性教員がどのように出現したのかを検討し、次に、大学女性教員の学歴や出身にもとづき、このグループの共通点を分析する。また、女性教員に対しても性差別が存在したことから、仕事や家庭を両立する彼女たちの役割葛藤をめぐる苦悩を呈示したい。最後に、彼女たちが作家として社会に与えた影響について分析する。

## I. 中国における大学女性教員の出現

### 1. 初期の外国人女性教員の影響

アメリカの歴史家ラッツ（Jessie G. Lutz）は著書『中国教会大学史』で、キリスト教の宣教師が中国に最も貢献した2つの分野の1つが女子高等教育だと述べている<sup>8</sup>。清末に誕生した教会女子大学は中国近現代史上画期的な現象であったと言える。新しい女性知識人を育成すること

4 張建奇（1997）「建国前我国高校女教師隊伍歴史演進」『有色金属高教研究』第4期、61-63頁。

5 蔡鋒（2003）「民国時期高校女教師隊伍の建設と発展」『中華女子学院学報』第15巻第5期、16-21頁。  
李巧敏（2012）「1927-1937年の高校女性教師研究」（修士学位論文、曲阜師範大学）など。

6 呂芳芳（2018）「民国期大学女教師教学研究」（修士学位論文、浙江師範大学）。黄湾湾（2018）「民国時期大学女教師學術之研究」（修士学位論文、浙江師範大学）。陳晨（2015）「民国時期大学女性教師群体研究」（修士学位論文、浙江師範大学）など。

7 杉本史子（2020）「国立女子北京師範学院について—日本占領下北京における女子教育」『立命館文学』667号、立命館大学人文学会編、1635-1648（65-78）頁。

8 傑西・格・盧茨（曾鉅生訳）（1987）『中国教会大学史1850-1950』、浙江教育出版社。南治国（2002）「但開風氣敢為先——基督教与清末女子教育」『北京大学学報（哲学社会科学版）』第39巻第4期から再引用。

に教会女子大学の貢献は大きい。しかし、当時の中国では封建的な礼教に制限されており、教員に関する規定や関連制度はまだ性差別的な色彩を持っていた。高等教育機関は適切な中国人女性教員を採用できず、まず外国人女性教員を招聘した。算数、理科、外国語、音楽、体操などの授業を主に欧米の女性教員に頼っていたわけである。

華南女子大学<sup>9</sup>（以下、華南女大と略する）が1908年に華南女子学堂として設立された時、教員の人数は極めて限られており、多くは米国で大卒以上の学歴を取得した女性教員が務めていたが、その中には博士号や修士号を取得した人もいた。金陵女子大学<sup>10</sup>（以下、金陵女大と略する）は1915年に開校した当初、華南女大の状況より少し良かった。呉貽芳氏<sup>11</sup>の回想によると、「当時の教職員は6人しかいなかったが、そのうちアメリカ人の学者は4人、中国人は2人だった」「1917年には教員の数が増えた。理系には化学のルース・チェスト博士（Dr. Ruth・M・Cheste）と生物学のコラ・リーヴス博士（Dr. Cora Reeves）がいた。文系には宗教学のリーヴェンバーグ（Miss Rivenberg）と英文学のメアリー・シプリー（Miss Mary Shiply）などがいた。教務や登録を専任で管理するグンドラフ（Miss Gundlach）などがいた」。

当時、外国人女性教員の数是非常に少なかったが、彼女たちは自国の「フェミニズム」思想、すなわち「女性も何かできる」という思想を中国人女性にもたらした<sup>12</sup>。即ち、中国の女性知識人に模範を示し、伝統的に家庭の枠内に拘束されてきた中国女性が新しいキャリアを選択できる可能性を示した。彼女たちは「中国で教師になる」ことを、生計を立てる手段としてだけでなく、社会的使命——中国女性を救う使命として捉えたのである。

9 1908年1月、華英女子学堂（華南女子大学予科）はメソジスト聖公会によって中国の福建省福州市で設立されたキリスト教の教育機関で、学長は女性宣教師 Miss Lydia Trimble（程呂底亜）である。1916年、華南女子大学と改称。1917年、大学課程を設置した。1929年、王世静は理事会から院長に任命され、初代華人院長となり、1951年まで院長を務めた。1933年6月、教育部は華南女子文理学院の臨時立案を許可した。1950年、福建協和大学に合併され、福州大学（今の福建師範大学）となった。<https://zh.wikipedia.org/zh-cn/華南女子大学>（2023年11月21日参考）

10 金陵女子大学：1913年にアメリカ合衆国長老教会、メソジスト監督教会、バプテスト諸教会とキリストの教会（有楽器派）によって設立された。1915年、中国の江蘇省南京市で開校した、中国初の女子大学である。初代校長はローレンス・サーストン夫人（Mrs. Laurence Thurston）。1928年、呉貽芳は校長を務めた。1930年に国民政府教育部に登録され、金陵女子文理学院に改称された。1951年、私立金陵女子文理学院と私立金陵大学は公立金陵大学に統合され、1952年の全国の高等教育の再編により金陵大学は廃止され、元金陵女子文理学院と南京大学の師範学院は南京師範学院に統合された（1984年に南京師範大学に改名）。1980年代、呉貽芳は金陵女子学院の復校を推進した。1987年3月、南京師範大学に頼って金陵女子学院を正式に設立した。<https://zh.wikipedia.org/wiki/金陵女子大学>（2023年11月21日参考）

11 呉貽芳：1893年生まれ、中国の教育者、社会活動家、クリスチャン。彼女は金陵女子大学の第1期卒業生であり、卒業後、北京女子高等師範学校で教鞭を執った。1921年にアメリカに留学し、1928年にミシガン大学の生物学博士号を取得した。卒業後帰国し、金陵女子大学学長に就任した。彼女は中国初の女性副知事であり、世界で初めて国連憲章に署名した女性である。<https://zh.wikipedia.org/wiki/吳貽芳>（2023年11月21日参考）

12 王銳（2018）「民国時期来川女伝教士的角色審視——以華西協合大学為中心」『長江師範学院学报』第34巻第6期、59頁。

## 2. 女子高等教育の発展

「五・四運動」前の中国は、自ら運営する女子高等教育機関は存在しなかった<sup>13</sup>。教会によって創設されたミッション系大学は北京の協和女子大学、南京の金陵女大と福州の華南女大3校のみであった。当時、中国の女子に高等教育は開放されてはいなかった。易 (2019)<sup>14</sup>によると、中国の女子に対する大学の門戸開放は、五四期「大学開女禁」に関する論争に伴い、本格化した。中国の大学における女子教育を解禁するか否かの議論に影響を与えたのは、胡適である。胡適は、女子への教育開放を賛成し「従来女子教育は女子に初等教育を少しだけ与え、高等教育を与えてはいなかった。過度に教科書を暗記させ、実用的な知識や生活のスキルを学ぶことは許さなかった」と述べている。彼は「女子教育の失敗を補うために、女性に開放的な教育を提供することが重要である」と主張した。

胡適は手順として3つのステップをあげた。第一に、大学は学識豊かな女性教授を採用すべきであり、その出身国を問わず、中国国内外の女性を対象とすべきだ。第二に、大学はまず女子聴講生を受け入れるべきだ。第三に、学界は現行の女子教育制度を検討し、カリキュラムを大幅に改革し、女子中学校のカリキュラムと大学の予科を結びつけ、高等女子師範の予備課程を大学の予科と同等にするべきである<sup>15</sup>。胡適の主張は、高等教育機関に女性教員がほとんどいなかったという事実も反映している。

大学の「開女禁」が女性教員の採用を後押ししたとも言える。大学が女性教師を採用しなければならない理由は多岐にわたっており、その一つは大学が女子学生を募集しているのに女性教師がいない場合、多くの不便があったからだ。当時、大学は女性教師を採用すれば、親を安心させることができるだけでなく、女性教師も女性指導や学監などを兼任し、多様な役割を果たすことができた。そのため、1920年に北京大学が初めて女子学生の入学を許可すると、アメリカに留学した陳衡哲を歴史学部の教授として招聘した。陳衡哲は中国において、女性で初めて国立大学教授になった<sup>16</sup>。次第に他の大学が女性教師を採用し、中国女性が高等教育に従事するようになった。

1919年4月に中国が最初的女子高等教育機関——北京女子高等師範学校（以下、女高師と略す）を創設した。1924年の統計によると、当時の全校教職員124人のうち、女性教師は10人で、女性教員の人数は多くなかったが、一定の規模として出現し、楊蔭瑜、袁昌英、呉貽芳らが教鞭を執っていた<sup>17</sup>。これらの高等教育機関の女性教員の出現は、当時の社会が大学女性教員を必要としたことを示している。

13 陳東原 (1928)『中国婦女生活史』商務印書館、388頁。

14 易琴 (2009)「但開風氣敢為先——試析五四時期“大学開女禁”論争的過程和意義」『歴史教育（高校版）』第2期、33頁。

15 胡適 (1993)「大学開女禁の問題」王学珍・郭建榮『北京大学史料（1912-1937）第三冊』北京大学出版社、898頁。

16 張建奇 (2010)「我国早期高校女教師隊伍的形成与發展」『高等教育研究』第31卷第5期、83頁。

17 項建英 (2017)「民国時期大学女教師群体形成及其特徵」『高教探索』第9期、108頁。

## Ⅱ. 大学女性教員の発展

### 1. 大学女性教員の基本状況

#### (1) 数量と出身地：

表 1 民国21年（1932年）全国大学教員数

学校類別	教員人数	女性教員
大学	4,420	172
国立大学	2,365	49
省立大学	580	7
私立大学	1,475	116
独立学院	1,554	56
国立学院	172	1
省立学院	313	0
私立学院	1,069	55
専科学校	735	24
国立専科学校	52	8
公立専科学校	94	2
省立専科学校	347	2
私立専科学校	242	12

出典：民国教育部編（1935年）『二十一年度全国高等教育統計』、商務印書館より筆者作成。

1920年代を通じて、大学の女性教員の総数は少なく、大学教員全体に占める割合も非常に低かった。1925 - 1926学年度、全国の大学及び専門学校の女性教職員は教職員総数の3.89%にすぎなかった。1925年から30年代初頭にかけて、大学教員の男女比を記録した地方報告がいくつかある。例えば、1929年には国立浙江大学の教員169人のうち、女性はわずか2人であり、1931年には河南省の大学教員179人のうち、女性はわずか9人であった<sup>18</sup>。1932年に全国の専門学校以上の教員は6,709人（表1）、女性教員は252人に達し、教員全体の3.7%を占めていた<sup>19</sup>。

大学女性教員の出身地は多様である。例えば1936年、金陵女子大学の中国人女性教師は27人いた。浙江省6人、江蘇省5人、広東省4人、上海市2人、福建省2人、湖北省3人、山東省2人、北平市1人、広西チワン族自治区1人、湖南省1名であった。そのうち、浙江省、江蘇省、広東省、上海市、福建省、広西省などの東南沿海一帯出身者が75%を占めている<sup>20</sup>。多くの大学女性教員は沿海部出身であることがわかる。これらの地域は西洋の民主主義の影響を早く

18 河南教育庁（1931年）「中華民国二十年度河南教育統計図表」。注5に同じ、李巧敏（2012）、8頁から再引用。

19 民国教育部（1935）『二十一年度全国高等教育統計』上海：商務印書館、5-18頁。

20 朱峰（1992）『基督教与近代中国女子高等教育——金陵女大与華南女大的比較研究』、福建教育出版社、260-263頁。



から受け、思想が相対的に開放的で、女性が比較的高い教育を受けることができたためと考えられる。

## (2) 女性教員の教育背景

1927年に南京国民政府が公布した「大学教員資格条例」によると、大学教員は教授、副教授、講師、助教に分かれる。その資格は、助教は必ず国内外の大学を卒業し、学士号を取得した者でなければならない。講師は国内外の大学を卒業し、修士号を取得した者、または助教で1年以上の経験があり、特別な成績を収めている者でなければならない。副教授については外国の大学院で何年か研究して、博士号を得て、相当の成績を有する者である。または講師で1年以上の教育経験があり、特別な成績の者である。または国学の上で特殊な貢献者である。教授は副教授として2年以上の教育経験があり、特別な成績の者である<sup>21</sup>。

国内の大学卒業生にも大学教員の資格があり、講師、副教授、教授への昇進資格もあるが、留学して修士号や博士号を取得した人の方が有利であった。当時、大学教員のほとんどは海外留学経験のある学者であった。米国、カナダ、欧州などの国で博士号や修士号を取得した中国女子留学生は、大学の女性教師となる重要な人材となった。1914年の統計によると、米国に留学した中国人留学生1,300人のうち、94人が女子だった。1917年、アメリカに留学する女子生徒の数は200人に増加した<sup>22</sup>。1925年、米国に留学する学生の総数は2,500人で、そのうち女子は640人で25.6%を占めた<sup>23</sup>。当時、中国では女性が様々なルートで留学し、その一部は20年代に大学教員を務めた。陳衡哲は1914年に清華大学の試験に合格して米国に留学することができた。袁昌英、林徽因らは自費で欧米に留学した。袁昌英は英国で修士号を取得後、1923年に帰国して北京女高師で講師を務め、林徽因は帰国後に東北大学（現遼寧省）建築学部教授などを務めた。中央または地方政府が援助して派遣した者もいる。楊蔭榆<sup>24</sup>は1907年前後に江蘇省の官費留学生として日本に派遣され、日本の東京女子高等師範学校で学んだ。1913年に卒業して帰国後に北京女子師範学校で学監と数理教員に任ぜられ、1918年、中国教育部（日本の文部科学省に相当）の出資でアメリカに留学し、コロンビア大学の修士号を取得した<sup>25</sup>。謝婉瑩（冰心）<sup>26</sup>は教会大学や宗教団体の推薦で外国の大学から奨学金を受け、米国で修士号を得たのち帰国、1926年

21 宋恩栄・章咸（2005）『中華民国教育法規選編』江蘇高教出版社、636-637頁。

22 「留美中国学生会小史」『東方雜誌』（1917年）第14巻第12号。注4に同じ、張建奇（1997）、61頁から再引用。

23 汪一駒（1978）『中国知識分子与西方：留学生与近代中国（1872-1949）』楓城出版社、106頁。

24 楊蔭榆：1924年2月、彼女は国立北京女子師範大学の学長に就任し、中国初の大学女性学長となった。しかし、1925年「女師大事件」に軍閥統治の安定を守るために学生の政治参加を阻み、学長の職を辞めた。

25 櫻庭ゆみ子（2009）「『彼女たち』の近代・『彼女たち』のこぼれ——その1 ニューヨークの楊蔭榆」『慶應義塾大学日吉紀要中国研究』2号、231頁。

26 「冰心」は王昌齡の詩の文句「一片冰心在玉壺」に由来するペンネームである。中国では姓の「謝」をつけずに呼ぶのが普通であるが、日本では「謝」をつけることが多い。なお、「冰」は「氷」の異体字であるが、謝冰心の場合は日本においても普通「冰」の字を使う。

に燕京大学の講師に招聘された。勞君展はフランスに赴いてリヨン大学、パリ大学に進学して数理を専攻し、1927年に帰国した後、北京大学などの大学で数学を教授した。司徒月蘭は1922年にアメリカに留学して、帰国後に南開大学、燕京大学、上海聖ヨハネ大学などで教授した<sup>27</sup>。

表2は、1937年までに大学教員になった女性で、筆者が資料を入手できた女性教員についてまとめたものである。大学の「開女禁」後、国内の大学の女子卒業生も大学教員になり始めた。1920年代初め、金陵女子大学の第1期卒業生の呉貽芳は国内の大学を卒業した最初的女性教員になった。呉貽芳は1919年に卒業した後、北京女子高等師範学校学長の方還に招かれ、同校で英語教師と英語部主任を務めた。馮沅君は、1925年に北京大学国学研究所を卒業後、金陵大学、中仏大学、暨南大学、復旦大学、安徽大学、北京師範大学、北京大学などで教員を務めた。洗玉清は嶺南大学を卒業後、学校に留まって教鞭を執った<sup>28</sup>。民国後期になると、高等教育を受ける女性が増えるにつれて、これらの女子学生は各方面で優秀な成績を収め、卒業後に学校に留まって助教を務める者はますます多くなった。

彼女たちの研究は、教育や文学といった女性向きの分野に限らず、科学、工学、医学などの自然科学や産業技術の分野へと多岐にわたった。

表2 一部の大学女性教員の状況一覧表

生年月日	名前	出身地・貫籍	学歴	勤務学校	専門・授業科目	備考・出典
1884年	謝紹英	福建省	コーネル大学	華南女子大学	音楽	謝紹英は福州女子学院で音楽教員を務めた <sup>29</sup> 。「1912年、年間を通じて学校で教鞭を執ったのは謝紹英一人である。この時期の授業は、1人の教員が複数の学科を兼任する現象がよく見られた。」 <sup>30</sup> 彼女が兼任している科目は不明。
1884年	楊蔭榆	江蘇省無錫市	東京女子高等師範学校（理科博物科）、コロンビア大学（教育学）	江蘇省立第二女子師範学校、北京女子高等師範学校、東呉大学	外国語、生物	楊は帰国して江蘇省立第二女子師範学校の生物学の教員兼教務主任の職に就いた <sup>31</sup> 。
1893年 1月26日	呉貽芳	江蘇省泰興出身、本籍は浙江省杭州	金陵女子大学、ミシガン大学（生物学）	北京女子高等師範学校、金陵女子大学	英語	
1893年 7月29日	陳衡哲	江蘇省武進県	ヴァッサー大学（文学）、シカゴ大学（西洋史）	北京大学、東南大学、四川大学	歴史学（西洋史）、英文	

27 張晨（2019）「民国時期大学女子教師群体の產生及特点」『開封教育学院学報』第5期、9頁。

28 同16。

29 宮宏宇（2020）「清末留美衆人考（1900-1910）」『中国音楽学』第4期、47頁。

30 同20、74頁。

31 王鶴（2017）「楊蔭榆：中国第一位大学女校長」『中国青年報』（2017年08月25日04版）、[http://zqb.cyol.com/html/2017-08/25/nw.D110000zgqnb\\_20170825\\_1-04.htm](http://zqb.cyol.com/html/2017-08/25/nw.D110000zgqnb_20170825_1-04.htm)（2023年10月23日参照）

1894年 10月11日	袁昌英	湖南醴陵	エディンバラ大学	北京女子高等師範学校、武漢大学	文学	
1895年	冼玉清	本籍は広東省南海県西樵鎮で、マカオに生まれた	嶺南大学	嶺南大学	文学	
1897年	俞慶棠	江蘇省太倉市	コロンビア大学	上海大夏大学、中央大学	教育学	1927年、彼女は第四中山大学（後に中央大学に改称）教授に招聘された <sup>32</sup> 。
1897年 1月29日	王世静	福建省福州市	ミシガン大学	華南女子大学	化学	
1897年 2月24日	蘇雪林	本籍は安徽省太平で、浙江省瑞安に生まれた	北京女子高等師範学校、リヨン国立高等美術学校	滬江大学、東呉大学、安徽大学、武漢大学	文学	
1898年 11月1日	毛彦文	浙江省江山市	ミシガン大学	暨南大学、復旦大学	教育学	
1900年 3月10日	陆慎儀	江蘇省	コーネル大学（文学）	金陵女子大学、中央大学、湖南大学	数学と物理	
1900年 7月1日	顧静微	江蘇省嘉定縣（今の上海市）	コーネル大学、イエール大学	南開大学、大同大学、唐山交通大学	物理	
1900年 9月4日	馮沅君	河南省南陽市唐河県	北京大学、パリ大学	河北女子師範学院、金陵大学、北京大学、復旦大学、天津女子師範学院、武漢大学、東北大学	文学	
1900年 10月5日	謝婉瑩	福州府侯官県（今の福州市鼓楼区）で生まれた	ウェルズリー大学	燕京大学、北平女子文理学院、清華大学	国文	
1900年 11月4日	勞君展	湖南省長沙市	リヨン大学、パリ大学	北京大学	数学	
1901年	程俊英	福建省福州市	北京女子高等師範学校国文部	上海大夏大学、華東師範大学	国文	
1901年 12月23日	林巧稚	福建省同安県鼓浪嶼	北平協和医学院（1929年）	鼓浪嶼高等女子師範学校	医学（産婦人科）	
1902年	倪逢吉	浙江省杭県	金陵女子大学、シカゴ大学	金陵女子大学、燕京大学、輔仁大学、	歴史と社会、家政学	
1904年 6月10日	林徽因	福州府閩県	ペンシルベニア大学（建築学）、エール大学演劇学院（舞台美術）	東北大学、燕京大学、清華大学	建築学	

32 喬梁（1986）「我国“民衆教育之母”——俞慶棠」『教育評論』第5期、66頁。



1905年 9月12日	雷潔琮	本籍は広東省 台山で、広東 省広州で生ま れた	南カリフォルニ ア大学	燕京大学、江西 泰和中正大学、 東興大学、涇江 大学、聖ヨハネ 大学、華東大 学、震旦女子文 理学院	社会学	
----------------	-----	----------------------------------	----------------	--	-----	--

出典：特に注記のない者は各人のウィキペディアページにより、筆者作成。

注：ここでの勤務学校とは1937年以前の勤務先のみを指し、1937年以降の勤務先は本表に含めない。

### (3) 給料（月給）

表3 大学教員の月俸（1927年）

級別 類別	一級	二級	三級
教授	500元	450元	400元
副教授	340元	320元	300元
講師	260元	240元	200元
助教	180元	160元	100元

出典：中国国民党中央委員会党史史料編纂委員会編『革命文献』第56輯、12頁、橋本（2012）<sup>33</sup>をもとに作成。

1927年9月、教育行政委員会は「大学教員俸給表」（表3）を公布し、教授の月給は400－600元、副教授の月給は260－400元、講師の月給は160－260元、助教の月給は100－160元と規定した。広州を例にとると、1920年代の広州の大学女性教員の月給は約200元で、毎週の授業はせいぜい15－16時間だった。民国教育部の「二十一年度全国高等教育統計」によれば、華南女子大学の教師の月給はより高く、最高で333元であった。金陵女大女性教員の最高月給200元より133元多い<sup>34</sup>。非常勤講師は週2時間の授業を担当し、月収20元を得ることができた<sup>35</sup>。

1930年代、ある炭鉱労働者の月給はわずか17元で、他の産業の熟練技術労働者の最高平均給与は20元余りにすぎず、大学教員の月給の約十分の一に相当する。1920年代から1930年代にかけて、中国の物価水準にはあまり変化がなく、1927年の上海で非熟練労働者が5人家族を養うのには月21.134元必要で、そのうち食費は11.111元だった。熟練技術労働者では5人家族で、最低の生活費は35.185元（2人以上で働いてお金を稼ぐ必要がある）にすぎない<sup>36</sup>。これに比べると、この時期の大学女性教員の給与はかなり高い。

33 橋本学（2012）「南京国民政府下の大学教員任用制度に関する一考察——「國聯教育考察団」来華段階における関連規定の特色と限界を軸に」『大学論集』第43集、広島大学高等教育研究開発センター、180頁。

34 同19、139-140頁。

35 注5に同じ、蔡鋒（2003）、7頁。

36 呉瓊（1999）「民国時期教師薪俸的歴史演變」『教育評論』第6期、65頁。

## 2. 大学教員の職場における性差別

大学の給与は政府によって定められたもので、男女教員の待遇の違いはなかった。しかし、他の面では大学女性教員に対する不公平な待遇が垣間見える。男女の雇用機会の均等は、1930年代に法律で認められていた。しかし当時、多くの女性は実際にはその権利を得ておらず、女性知識人も例外ではなかった。そのため、他の分野と同様に、大学による女性教員への差別が存在した。大学にいる男性の多くは女性に対して偏見を持っていた。蘇雪林は自伝の中で、安徽大学で教鞭をとっていた時、学校が教職員4名を省政府に派遣しようとして不足経費の支給を要請した。誰かが派遣候補者として蘇雪林ら女性二人の名を挙げたところ、会議の席上で「女性の同僚を代表にすることに、私は大賛成です。そうすれば経費がすぐにもらえるでしょう」と笑いながら大声で言う人もいた<sup>37</sup>。意図があるか否かにかかわらず、このような性差別やステレオタイプを持つ言葉を使うことで、社会は女性に対する偏見を深めた。

大学における男性管理者の偏見と差別的な態度は、女性が大学に採用されにくだけでなく、昇進も困難にした。女性教員は就職、昇給、海外留学、研修、住宅などでも差別を受けた。当時の高等教育界では、同じ助教でも昇進するには男女で大きく条件が異なり、男性助教は直接講師に昇進することができるが、女性助教はまず「講員」を経なければならないという不文律があった<sup>38</sup>。性差別や男女の機会の不均等は民国期の大学女性教師の発展に深刻なマイナス要素であった。

職位においてもそれが高いほど女性の割合は小さくなる。1934年の河北省立女子師範学校教員を例にとると、62人の学校教員のうち、女性はわずか12人、そのうち教授の職位を持つのは3名だけで、残りの9人の女性教員は講師である。一方男性の教授は18人、講師は32人であった。職位が高くなるほど、女性の占める割合は低くなる<sup>39</sup>。女性は大学教員の仲間入りをしつつあるが、職位は中低レベルであることがわかる。

女性学長も少ない。ミッション系の女子大学では、王世静が華南女子文理学院学長、呉貽芳が金陵女子文理学院学長を務めた。彼女たちが学長を務めることができたのは、自身の才能を除いて、当時ミッション系教育機関が中国政府に登録した関連規定（教会大学は中国人が学長や院長を務めなければならない）のおかげである<sup>40</sup>。国立の一般大学では、楊蔭榆が北京女子高等師範学校の校長を務め、俞慶棠が江蘇教育學院の院長を務め、勞君展と張邦珍が国立四川女子師範學院の院長を務めたが、女性が校長を務める期間はそれほど長くない。

37 蘇雪林（1996）『蘇雪林自伝』江蘇文芸出版社、355頁。

38 同上、172頁。

39 「河北省立女子師範学校一覧」（檔案号：401206800-J0164-1-000001）、天津市檔案館藏。注5に同じ、李巧敏（2012）、17頁から再引用。

40 1924年に中国国内で教会学校を改革するための反キリスト教運動が発生し、当時の世論は中国国内に設置された外国の教会学校を中国人が管理し、教育権の回収を主張した。このような社会的思潮に後押しされて、南京国民政府も中国人が教会大学の学長を務め、取締役会を組織して、同大学を運営するための理事会を組織するという提案を発表した。注5に同じ、李巧敏（2012）、9頁を参考。

### 3. 大学女性教員の役割葛藤

民国時代、大学の女性教師層が形成されたが、彼女たちは学術研究、教育管理などの仕事を遂行するだけでなく、子育ての責任を負い、妻、母、教師などの多くの役割を果たさなければならなかった。しかし、多重の役割のもとで、彼女たちの時間と精力は限られ、緊張や焦りが生まれ、役割葛藤に陥ることは避けられなかった<sup>41</sup>。

#### （1）民国時代における大学女性教師の役割葛藤の二重表現

「役割葛藤」とは、「個人がある役割の多重的な期待を満たすことができない場合、または個人が義務、権利、規範の相互に矛盾する役割を同時に演じている場合、心と感情による矛盾と衝突」を意味する<sup>42</sup>。民国時代、大学の女性教師は役割間葛藤と役割内葛藤に直面することが多かった。

##### ①役割間葛藤

当時の社会では、「良妻賢母」への推賞と「職業婦女」<sup>43</sup>への疑念が共存していた。才気あふれる大学の女性教師は、伝統的な性別役割意識の障壁を打ち破り、独立した職業を担い、男性と同じ社会的地位を追求したいと望んでいた。同時に、心の奥底では良妻賢母への根強い規範から抜け出すことができなかった<sup>44</sup>。即ち、時間が限られ、ストレスが大きく、妻や母としての役割と教師としての役割を両立させることは難しいと感じており、家庭と学校の間で奔走しなければならなかった。

大学の女性教師は、家庭と仕事の間で難しい選択を迫られる。彼女たちは経済的な自立を切望し、旧態依然とした男性に依存する生活から脱したように見えるが、家事と子育ての重荷は軽減されず、休憩時間もない。「新しい女性」の代表として、彼女たちは家庭とキャリアの二者択一を迫られることによる疲労感と無力感に耐えなければならない<sup>45</sup>。

##### ②役割内葛藤

高等教育分野にいる大学の女性教師は、授業の重責を担わなければならないだけでなく、学内のさまざまな雑務を担当している。即ち、教育、研究や管理という役割内の葛藤に直面している。

女性教師として、彼女たちは教育の責任を負わなければならない。教師は、常に自省し、自律し、学生の尊敬を得なければならない。民国時代の大学女性教師は、豊富な研究成果を出さ

41 注5に同じ、李巧敏（2012）、25頁。

42 董沢芳（2010）「論教師的角色衝突与調適」『湖北社会科学』第1期、167頁。

43 本文は劉方（2006）と王蕊（2022）の研究に基づき、民国期には「職業婦女」「職業女性」という呼称があったが、「職業婦女」と表記することとする。劉方（2006）「民国時期的新興職業女性」（修士學位論文、吉林大学）。王蕊（2022）「民国職業女性生育困境原因及根源探析」『中華歷史与傳統文化論叢（2022年卷）』、燕山大学出版社、309-322頁。

44 孫秀玲・韓雪童（2018）「民国時期大学女教師的角色衝突与調適——基於社会学視点的分析」『当代教育科学』第9期、36頁。

45 夏一雪（2010）「現代知識女性的角色与突围策略——以陳衡哲、袁昌英、林徽因為例」『婦女研究論叢』総第100期、81頁。

なければ、学界で地位を維持することができなかった。一方で、生理学および心理学的な特性から、彼女たちは女子学生に対する管理者の役割を与えられた。「開女禁」の影響で、女子大生の入学人数は日々増加し、大学の女性教師は「母性」を発揮して学生を管理するよう期待された。

## (2) 大学女性教師の役割葛藤に影響を与える要因

### ①伝統的な性別役割意識の固定化

儒教の礼儀作法に縛られていた封建社会では、「三綱五常」や「三従四徳」の伝統的な道德規範が広く受け入れられ、家庭の役割分業において「男尊女卑」や「男外女内」の性別役割分業が期待されていた。民国初期、職業婦女は経済発展を促進する中堅として、家父長制的な支配階級の賛賞を受けた。支配階級の賛美は、女性たちに受け入れられ、内面化された<sup>46</sup>。

しかし、「新しい女性」たちの成長に伴い、世論の「良妻賢母」を育成するねらいから離れ、男性は自分たちの権益が侵害されようとしていることに気づき、働く女性に対する見方も変わった<sup>47</sup>。伝統的な固定観念の影響を受けて、支配階級や知識人だけでなく、一般大衆からも働く女性には批判され、嘲笑された。

### ②国家政策の介入

民国時代、支配階級の価値観は「職業婦女」と「良妻賢母」の間で常に揺れ動いた。働く女性の典型として、大学の女性教師は国家政策の影響を受けた。1919年「女子高等師範学校規程」の公布は、女子師範教育を規定、女性が高等教育に参加することを保障した。その後、1924年の国民党の一大宣言では「男女経済平等」を党綱とした。1926年国民党の第二次全国代表大会の婦女運動決議で、婦女労働法を制定し、「男女職業平等」、「男女同一労働同一賃金」のスローガンを掲げていたが<sup>48</sup>、1931年に国民党の第四次全国代表大会は、「女子教育は健全な徳性を重視し、母性の特質を維持し、良好な家庭生活と社会生活を建設しなければならない」と再確認した<sup>49</sup>。支配階級は働く女性を法律で保護する一方で、「良妻賢母」教育の政策を堅持したのである。

政府の態度は男女両性の利害が対立していることの現れである。当初、政策決定者たちは、女性の職業意識の覚醒を通じて、社会的解放を促進し、生産力の発展を増進したいと考えていた。しかし、両性の「役割」が交錯し、「新しい女性」の役割が家父長制的支配を脅かすと、彼らはまた全力でそれを抑制し、既存の支配的地位が侵害されないように努力した。国民政府の政策は、働く女性の自立の精神を損なうだけでなく、女性を仕事と家庭の二者択一というジレンマに直面させた。

46 同43、王蕊（2022）、321頁。

47 余華林（2007）「20世紀二、三十年代“新良妻賢母主義”論析」『人文雑誌』第3期、151頁。

48 中国第二歴史檔案館編（1991）「国民党“二大”會議關於婦女運動決議案記錄（1926年1月16日）」『中華民国史檔案資料匯編・第四輯（上）』江蘇古籍出版社、471頁。

49 杜学元（1995）『中国女子教育通史』貴州教育出版社、494頁。

### ③女性の自己疎外

民国期、婦人の「母性」は特に推賞され、妊娠・出産・育児は女性の「天職」とされた。スウェーデンの教育学者エレン・ケイの「母性論」は、民国時代の女性「育児天職論」に理論的根拠を提供した。エレン・ケイは「母性」は自然に女性に与えられる能力であり、「この能力は、生命を生むだけでなく、それによって保護し、恋し、育て、訓育する」と指摘した<sup>50</sup>。彼女の「母性論」が中国に伝わると、中国の伝統的な「男は外、女は内」という思想と結びつき、「母性」という言葉は知識層の間で論争を引き起こした<sup>51</sup>。

「育児天職論」と同時に存在したのは「女性独立論」である。当時の知識人は、「自立心を失い、他人に全面的に依存するようになり、他人に飼われ、振り回され、翻弄されるような人間が、人格と魂を持った人間だと言えるだろうか……職業婦女は、労働し、少なくとも自立して生活し、完全に男に頼っていないという点で、単純な家庭婦女よりすばらしい」<sup>52</sup>と考えていた。

知識人男性は「母性」の重要性を強調するとともに、女性は独立を図るために社会進出する必要があると考えた。このような矛盾した考え方の併存は、民国期における職業婦女の苦境を悪化させた。このままでは、彼女たちは自分の役割から疎外されることになり、「古い女性」の足枷を完全に破ることができないだけでなく、「新しい女性」のイメージにも適応することも難しくなった。

## Ⅲ. 大学女性教員の社会に対する影響

### 1. 自我意識の発見

民国の大学女性教員たちは教育家、作家、詩人、思想家、翻訳家など複数の職業を兼任しており、教師は彼女たちの職業の一つに過ぎなかった。即ち、大学女性教員のほとんどが、この時期に作家として活動した。彼女たちは学生時代に五・四「新文化運動」の洗礼を受けており、新文化運動は女性の人格独立を提唱する流れで、多くの女性を徐々に目覚めさせた。

『五四運動回憶録』では、「私は新しい思潮の激流に巻き込まれた。私の思想は急激に変化し、封建社会が私に与えた影響と精神的な鎖は、この時完全に粉碎された。……私は封建倫理、綱常名教と決裂する勇氣を持って、……この時、私の精神は封建的な束縛を解いて、本当に馬がたづなを離れたように急いで走りたいと思った」<sup>53</sup>という記述が見られる。

創作活動は、大学女性教員の将来の作家としてのアイデンティティ形成のために思想的基礎

50 愛倫凱（黃石訳）（1927）『母性復興論』民智書局、69頁。

51 沈雁氷（1920）「愛倫凱の母性論」『東方雑誌』第17巻第17号。黃石（1924）「愛倫凱の母性教育論」『婦女雜誌』（上海）第10巻第5号。陳碧雲（1933）「論婦女職業与愛倫凱の母性復興」『女青年月刊』第12巻第9期。夢雲（1941）「愛倫凱与母性論」『新東方』第2巻第6期。を参考。

52 少問（1934）「家庭婦女与職業婦女」『女声』第2巻第20-21期、2頁。

53 中国社会科学元近代史研究所（1979）『五四運動回憶録』、北京社会科学出版社、510-512頁。



を築いた。彼女たちは、自分の生活から出発し、女性の心の奥底を豊かな筆致で描いた。陳衡哲にとっては、小説は自己を表現する手段のひとつにすぎなかった。のちの丁玲、白薇、廬隱、蘇雪林ら五四時期の女性作家たちの多くが、女性の解放を求めて一人称の語りで心情を吐露する<sup>54</sup>。蘇雪林の『棘心』は自分の学生時代の様々な経験を記述しているものであり<sup>55</sup>、馮沅君の『春の痕』は個人の恋愛経験をめぐって物語を紡いだものである。雷潔琮は彼女の文集の中で教師の職に対して告白している。「私の肩書きは多いが、私が最も重視するのは“教授”であり、それは私が普通の大学教師であることを示している」<sup>56</sup>。このような濃やかで自伝的な色彩を帯びる作品は、自分、恋人や友人の経歴を考察することにより、女性の主体性を描いている。彼女たちは創作作品の中で封建礼教と宗法思想による女性に対する抑圧と破壊を訴え、女性が解放を渴望する心の声と自身の解放に対する執着をリアルに表現している。

## 2. 都市婚姻に対する影響

20世紀初頭、一部の民主的知識人は「結婚革命」というスローガンを掲げ、「男尊女卑」、「夫唱婦随」、「指腹为婚」<sup>57</sup>、「早婚早娉」などの古い観念を打破し、愛情に基づく結婚を求めた。西洋の法律、結婚離婚の自由などの新しい観念を主張した。ヘンリック・イブセンの戯曲『人形の家』<sup>58</sup>は中国の社会に深く影響を与えたため、勇敢に結婚の枷を突き破るノラは、一般女性に啓発を与えた。これは大学の女性教師により顕著に表れている。

大学女性教員の多くは、着任前に中国と西洋の教育を組み合わせた体系的な学校教育を受け、男女間のオープンな社会的交流、自由恋愛、自由結婚を提唱していた。職場に入った後、独立した収入を得て、自立した結婚を可能にしていた。彼女たちの自由な結婚観の表れの一つとして、婚約の解消経験があげられる。例えば、馮沅君は北京女子師範学校に行くために、母親に婚約解消を要求した<sup>59</sup>。陳衡哲も家族が決めた仲人結婚を拒否し、叔母の家に逃げた<sup>60</sup>。楊蔭榆は、「ノラ」の典型的な代表と言える。楊蔭榆は適齢期になり、会ったこともない若旦那と結婚した。しかし結婚後、楊蔭榆は夫が無能であることに気づき、決然と立ち上がり、夫との関係を断った。もう一つまれな例は、毛彦文の結婚からの逃亡である。毛彦文は幼い頃、父は彼女を

54 櫻庭ゆみ子（2011）「「彼女たち」の近代・「彼女たち」のこぼれ——その2 陳衡哲（2）」『慶應義塾大学日吉紀要中国研究』4号、187頁。

55 張文一（2019）「浅論蘇雪林創作中的自伝性」『文学教育』（上）第4期、30頁。

56 王思斌・解戰原（2005）『雷潔琮の學術思想及教育活動』、中国政法大学出版社、196頁。

57 中国の古い風俗で、親同士が生まれる前の子どもの縁組みをすること。

58 『人形の家』は、1879年にヘンリック・イブセンによって書かれた戯曲。ヒロインのノラ（妻）は、ヘルメル（夫）の病気を治すために、夫に隠れて偽造署名をしてクロクスタに金を借りたが、意図せずに文書偽造罪を犯した。数年後、ヘルメルはマネージャーに昇進し、クロクスタを追放した。クロクスタは証拠を持ってノラを脅迫したが、ヘルメルはそれを知って激怒し、ノラを「悪いもの」、「犯罪者」、「下賤な女」と罵った。ヘルメルは自分の前途はすべて彼女に破壊されたと言ったが、危機が去ると、すぐに妻への甘い言葉を取り戻し、ノラは自分が家庭の中で「人形」のように夫の地位に従属していることを認識した。夫の利己的で虚偽の醜い魂が明らかになり、彼女は最終的には断固として家出した。

59 殷鼎（1990）『馮友蘭』、台湾東大出版社、9-11頁。馮沅君は馮友蘭の妹である。

60 陳衡哲（馮進訳）（2006）『陳衡哲早年自伝——中国第一位官派留美女生』安徽教育出版社、126頁。

方国棟と婚約させた。しかし結婚式当日、毛彦文は父親と戦う覚悟を決めた。披露宴が終わった後、父親が昼寝をしているすきに、母は毛彦文に兄弟を付き添わせ田舎に避難させた。しかし花嫁が逃げたという情報はすぐに広まり、彼女は10日後には祖父母の家に逃げ、1カ月以上かくれた。最後に知県（県の長官）が乗り出し、毛彦文の代理で方家との婚約を解消した<sup>61</sup>。

大学の女性教員のほとんどは媒酌人が仲介した婚姻の苦しみを経験したので、結婚に慎重で、相手との精神的なつながりを重視した。馮沅君と陸侃如という才子佳人のカップルは胡適の講演会で知り合い、古典文学の研究について討論し、学術と事業上の協力を始めた<sup>62</sup>。1929年に上海で結婚し、馮沅君の短編小説集『卷施』の再版は、内容の修正から表紙デザイン、再版後記まで、陸侃如の手によるものだった。その後、2人は共同で編纂した初の学術著作『中国詩史』を出版し、学術界で好評を博した。1932年に2作目の著作『中国文学史簡編』も協力して出版した。陸侃如は馮沅君と共に序文や後記を書いている。林徽因と梁思成も同様である。彼らは一緒にアメリカのペンシルベニア大学に留学し、帰国後、林徽因は夫と一緒に農村に行き、中国の古い建物の絵を描き、文章を書いた。女性教師においては、親の命令で結婚する形も崩壊しつつあるように見える。このような変化の原因の一つは彼女たちが経済的に男性に依存していないことである。大学の女性教師は伝統的な結婚観念の転換を促進したと言える。

### 3. 他の階層の女性の模範となる

大学女性教員は校内で教育と宣伝の役割を果たすだけでなく、女性の権益のために声を上げることにも積極的に身を投じた。ほぼすべての文学や思想運動は新聞や定期刊行物等のメディアに依存している。政論的な定期刊行物や雑誌の創設やそれらへの参加は、大学教員が情報発信するための最も重要な手段である。陳衡哲は『独立評論』の創刊者の一員であり、1927-1937年の10年間で彼女が『独立評論』に発表した文章は47編に達した。陳衡哲は当時の女性問題に注目し、「女性問題の根本談」、「女性参政問題の実際の面」、「女性と職業」、「女子教育に関するいくつかの言葉」などの文章を発表した。林徽因は『新月』誌の創刊者の一人で、複数回記事を発表していた。凌叔華氏は燕京大学で教鞭を執っていた間、「現代評論」の文芸編集者であった。袁昌英は『現代評論』、『独立評論』、『大陸』などの雑誌に30編近くの文章を発表した。

彼女たちの文章、特にコメントは民主主義と自由の追求し、為政者に対する鋭い批判や建設的な意見を出している。陳衡哲は四川大学で教鞭を執っていた時、多くの女子学生が官僚や財閥の妾であることを発見し、四川当局への強い不満を感じ、同時に、抑圧された女性に同情した。怒りの下、陳衡哲は四川問題を暴露する文章「川行瑣記（二）四川的二云」<sup>63</sup>を発表し、「こ

61 雷家瓊（2016）「民国時期婚姻自主権怎樣發生變化——以代際衝突為焦點的考察」『民国研究』2016年春季号、112-113頁。

62 陸恂如・陸仰淵（1996）「伉儷情篤著青史——記陸侃如、馮沅君兩教授的事業与愛情」『紫金歲月』第6期。

63 1935年に彼女は四川大学の学長を務めた夫の任鴻雋と一緒に四川に赴き、有名な隨筆「川行瑣記」を書き、『独立評論』に連載した。1936年4月に「川行瑣記（二）四川的二云」を発表し、当地の批判を受け、彼女は四川を離れた。

れは女性の恥辱であり、大学教育の倒産である」<sup>64</sup>と述べ、女性に独立自主を勝ち取るように呼びかけた。陳衡哲は後に書いた散文「女子教育の根本的な問題」で女子教育を高く評価した。彼女は「女子教育は数千年来の奴隷根性の除去であり、独立した人格の教育であり、彼女たちが自分を解放し、檻から飛び出して、正々堂々とした人間になることができるように助けることだ」と言った<sup>65</sup>。袁昌英は中国女性の苦境にも深い体験と理解を持っている。彼女は「女性は自分の力量によって、社会で自立しなければならない」と考えている。

高等教育における女性教員はペンの力で、女性が男性と同等の地位と権力を得るために呼びかけた。他の階層の女性が家を出て、生産労働に参加し、女性の権利のために闘うことを奨励している。さらに、彼女たちは、学校を陣地とし、学生を対象として、率先垂範により多くのフェミニスト意識を持つ知識人を育成した。

## 終わりに

民国期の社会変革によって、女性は教育機会と大学への進学機会を得ることができ、大学女性教員の頭角を現す機会も創出された。大学女性教員は良好な高等教育を受けており、高い収入と独立自主意識を持っている。彼女たちのライフスタイル、社会的地位、社会への影響は、従来の女性、さらに同時期の女性と比べて明らかに異なっている。比較的少数の女性であるにもかかわらず、彼女たちの出現は社会の様々な女性の能力に対するバイアスを打ち破った。大学女性教員は自分の職業によって女性解放の範囲を家庭レベルから社会レベルに広げ、それを実践することで中国の広範な女性に進むべき方向を示した。

最後に、今後の課題について述べておきたい。本稿では、1912-1937年における中国の大学女性教員の状況を明らかにした。しかしながら、民国期中国において、女性実業家、女性商店主、女性速記者、女性ジャーナリスト、女性弁護士など、他の新しい職業婦人が歴史の舞台に登場した。本稿では、他の女性知識人がどのような姿であったかを明らかにすることができなかった。これらについて、今後も検討したい。

## 参考文献

### 中国語

- 愛倫凱（黃石訳）（1927）『母性復興論』民智書局。  
 蔡鋒（2003）「民国時期高校女教師隊伍的建設与發展」『中華女子学院学報』第15卷第5期、16-21頁。  
 陳東原（1928）『中国婦女生活史』商務印書館。  
 陳衡哲（1994）「女子教育的根本問題」『衡哲散文集』河北教育出版社。  
 陳衡哲（馮進訳）（2006）『陳衡哲早年自伝：中国第一位官派留美女生』安徽教育出版社。

64 張静（2007）「陳衡哲之三進四川——兼論「川行瑣記」事件」『中国社会科学院近代史研究所青年學術論壇』2007年卷、531頁。

65 陳衡哲（1994）「女子教育的根本問題」『衡哲散文集』河北教育出版社、120頁。最初に『獨立評論』第3号（1932年12月25日）に出版された。

- 崔恒秀（2016）「近代教会大学外籍女教師来华動因探析」『蘇州大学学报（教育科学版）』第4期、70-77頁。
- 董沢芳（2010）「論教師的角色衝突与調適」『湖北社会科学』第1期、167-171頁。
- 杜学元（1995）『中国女子教育通史』貴州教育出版社。
- 宮宏宇（2020）「清末留美樂人考（1900-1910）」『中国音楽学』第4期、46-48頁。
- 胡適（1993）「大学開女禁の問題」王学珍・郭建榮『北京大学史料（1912-1937）第三冊』北京大学出版社。
- 姜衛玲（2012）「我国近代知識女性的報刊活動及其社会影響」『編輯之友』第10期、114-116頁。
- 金涛・劉国雄（1983）『女学部委員訪問記』海洋出版社。
- 雷家瓊（2016）「民国時期婚姻自主權怎樣發生变化——以代際衝突為焦点的考察」『民国研究』2016年春季号、109-127頁。
- 李巧敏（2012）「1927-1937年的高校女性教師研究」（修士學位論文）、曲阜師範大学。
- 陸恂如・陸仰淵（1996）「伉儷情篤著青史——記陸恂如、馮沅君兩教授的事業与愛情」『紫金歲月』第6期。
- 呂芳芳（2018）「民国期大学女教師教学研究」（修士學位論文）、浙江師範大学。
- 民国教育部（1935）『二十一年度全国高等教育統計』商務印書館。
- 南治国（2002）「但開風氣敢為先——基督教与清末女子教育」『北京大学学报（哲学社会科学版）』第39卷第4期、101-105頁。
- 喬梁（1986）「我国“民衆教育之母”——俞慶棠」『教育評論』第5期、65-68頁。
- 宋恩榮・章咸（2005）『中華民國教育法規選編』江蘇高教出版社。
- 蘇雪林（1996）『蘇雪林自伝』江蘇文芸出版社。
- 孫秀玲（2019）「近代中国女教師身分認同的形塑、解構与重建」『教師發展研究』第4期、118-124頁。
- 孫秀玲・韓雪童（2018）「民国時期大学女教師的角色衝突与調適——基於社会学視点的分析」『当代教育科学』第9期、36-40頁。
- 汪一駒（1978）『中国知識分子与西方：留学生与近代中国（1872-1949）』楓城出版社。
- 王鶴（2017）「楊蔭榆：中国第一位大学女校長」『中国青年報』（2017年8月25日04版）、[http://zqb.cyol.com/html/2017-08/25/nw.D110000zgqnb\\_20170825\\_1-04.htm](http://zqb.cyol.com/html/2017-08/25/nw.D110000zgqnb_20170825_1-04.htm)（2023年10月23日参照）
- 王蕊（2022）「民国職業女性生育困境原因及根源探析」『中華歷史与傳統文化論丛（2022年卷）』、燕山大学出版社、309-322頁。
- 王銳（2018）「民国時期来川女伝教士的角色審視——以華西協合大学為中心」『長江師範学院学报』第34卷第6期、52-61頁。
- 王思斌・解戰原（2005）『雷潔琮的學術思想及教育活動』中国政法大学出版社。
- 王文俊（1998）『国立西南連合大学史料（四）（教職員卷）』：雲南教育出版社。
- 吳瓊（1999）「民国時期教師薪俸的歷史演变」『教育評論』第6期、63-66頁。
- 吳貽芳（1977）「金女大四十年（節録）」『中国近代教育史教学參考資料（下冊）』人民教育出版社。
- 夏一雪（2010）「現代知識女性的角色与突围策略——以陳衡哲、袁昌英、林徽因為例」『婦女研究論丛』第100期、80-86頁。
- 項建英（2017）「民国時期大学女教師群体形成及其特徵」『高教探索』第9期、107-112頁。
- 易琴（2009）「但開風氣敢為先——試析五四時期“大学開女禁”論爭的過程和意義」『歷史教育（高校版）』第2期、33-36頁。
- 殷鼎（1990）『馮友蘭』台湾東大出版社。
- 余華林（2007）「20世紀二、三十年代“新良妻賢母主義”論析」『人文雜誌』第3期、150-156頁。
- 張晨（2019）「民国時期大学女子教師群体的產生及特点」『開封教育学院学报』第5期、8-9頁と42頁。
- 張建奇（1997）「建国前我国高校女教師隊伍歷史演進」『有色金属高教研究』第4期、61-63頁。

- 張建奇（2010）「我国早期高校女教師隊伍的形成与發展」『高等教育研究』第31卷第5期、81-85頁。
- 張靜（2007）「陳衡哲之三進四川——兼論「川行瑣記」事件」『中国社会科学院近代史研究所青年學術論壇』2007年卷、515-536頁。
- 張文一（2019）「淺論蘇雪林創作中的自伝性」『文学教育（上）』第4期、30-31頁。
- 中国第二歴史檔案館編（1991）「国民党“二大”會議關於婦女運動決議案記錄（1926年1月16日）」『中華民国史檔案資料匯編・第四輯（上）』江蘇古籍出版社。
- 中国社会科学元近代史研究所（1979）『五四運動回憶錄』北京社会科学出版社。
- 中濟（1927）「廣東婦女在政治教育及專門藝術方面的職業」『生活』第1期。
- 朱峰（1992）『基督教与近代中国女子高等教育——金陵女大与华南女大比較研究』福建教育出版社。

## 日本語

- 加藤靖子（2019）「1920年代中国における女子高等教育機関をめぐる一考察」『アジア教育』第13巻、40-52頁。
- 崔淑芬（1996）「近代中国における師範教育の展開——清末から1948年までを中心として」（博士学位論文）、九州大学。
- 櫻庭ゆみ子（2009）「「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば——その1 ニューヨークの楊蔭榆」『慶應義塾大学日吉紀要中国研究』2号、193-232頁。
- 櫻庭ゆみ子（2011）「「彼女たち」の近代・「彼女たち」のことば——その2 陳衡哲（2）」『慶應義塾大学日吉紀要中国研究』4号、169-192頁。
- 佐藤尚子（1987）「中国における女子教育の發展とミッションスクール——清末から五・四時期まで」『国際基督教大学学報』I-A, 教育研究26号、53-69頁。
- 杉本史子（2020）「国立女子北京師範学院について——日本占領下北京における女子教育」立命館大学人文学会編『立命館文学』667号、1635-1648頁。
- 橋本学（2012）「南京国民政府下の大学教員任用制度に関する一考察——「國聯教育考察団」来華段階における関連規定の特色と限界を軸に」『大学論集』第43集、広島大学高等教育研究開発センター、171-187頁。